KODANSHA NOVELS

奥秩父狐火殺人事件
昭和六一年八月五日第一刷発行
KODANSHA NOVELS
定価六八〇円
著者—梶 龍雄 ©1986 TATSUO KAJI Printed in Japan
発行者—野間惟道
発行所—株式会社講談社
東京都文京区音羽二—一二—二一 郵便番号一一二—〇〇一 電話東京(〇三)—九四五—一一一一(大代表)
印刷所—株式会社廣済堂 製本所—株式会社堅省堂
落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取替え致します。
ISBN4-06-181261-0 (0) (文二)

江苏工业学院图书馆
藏书章

奥秩父狐火殺人事件

龍雄

ODANSHA NOVELS

講談社ノベルス

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

ブックデザイン＝市川英夫
カバーイラストレーション＝福田隆義
本文イラストレーション＝福田隆義

目次

第一章　都会の狐　7
第二章　女の花園　17
第三章　お絹様　25
第四章　真昼間の痴漢　46
第五章　狐火の夜　61
第六章　好色な神様　87
第七章　都会の灯　102
第八章　押しかけ探偵　127
第九章　死が多すぎる　166
第十章　最後の調査　179
第十一章　反転図　201

第一章　都会の狐

1

風がかなり冷たい。夏だというのに……。

天候不順だとか、冷夏だとか、気象情報はいっている。梅雨がそのまま七月にだらだらとのめりこみ、とうとう八月まで尾をひっぱって来た感じだ。

一両日には夏らしい天気になるだろうと、天気予報はいっていた。だが、このようすでは、なにかそれも期待できない感じである。

おまけに今日は、雨模様の風が出て来たようだ。

浅い谷間をはさんだむこうの斜面の繁りが、時に不穏に立ち騒ぐ。

五城は両手の人差し指と親指で四角のフレームを作って、その後ろから、沈んだ紺色の山肌を覗いて見た。そのままゆっくりと、フレームを横移動させる。

パッとした風景ではない。どこか憂鬱だ。だが、それがいかにも奥秩父の雰囲気そのものでもある。

うまく扱えば、それなりに効果が出るかも知れない。

突然、パンした指のフレームの中が、濃い黒と灰色にみたされた。大きな岩肌である。

ここにあがって来る道のりで、木の間から何度かその岩は望見した。上に高く突き出した所で、四、五メートル、ほとんどは高さ二メートルくらいで、二十メートル強の長さで横にのびている。

御岳神社の天狗岩と、村の者はいっている。

フレームを動かし続ける。

沈鬱に暗い鼠色の天狗岩の肌を嘗めて、フレームの中の視界はまた空中に開放され……突然、五城のパンの動きは停止した。

フレームの中に、目まぐるしいハーモニーを作る、色の祭典が飛び込んだのだ。下に拡がる目にしみるような白の色も、爽やかである。

白のブラウスにパンツ、その上に、ブルー、グリーン、イェロウー、サン・レッド……と、マルチカラーの

チェックのジャケットを、カジュアルにはおった、すらりとした背の女がいたのだ。
〝都会の狐〟とひそかにいわれている、あの女……。
五城はすぐ理解した。
こんな所だ。そんな都会の服装の女は、彼女しかいない。
都会の服装の女といえば、そのほかには、今、この村で夏期合宿(サマーコンピング)をしている、女子大学生たちもいる。
だが、フレームの中の女には、女子大学生たちの、無鉄砲に外にはじけ出てくるような若さはない。歳が美しさを、しっとりと内側に沈積させている。
五城はかなり呆然として、フレームの中から彼女を見つめ続けた。
柔(やわら)かな線を作る横顔(プロフィール)をこちらに見せて、女は崖縁に立っていた。
足下はほぼ垂直の崖となり、四、五十メートル下の谷底で、谷津川(たにつがわ)が岩と狂う音が聞こえるか、聞こえないか……。
秩父の山の地勢はゆるやかだ。対岸もなだらかな山の斜面である。
一度伐採(ばっさい)された後の、かなり見通しのきくそこには、一メートル前後に生え伸びた、苗木が規則正しく植林されている。
だが、手入れがおろそかにされているのか、繁茂した草に覆(おお)われているものも多い。
女はその斜面が空につきて、稜線を作るあたりに、視線をむけていた。
風が起こる。すぐやむ。そして、また起こる。
女の髪が、ひきしまった眉(まゆ)と、品良く閉ざされた唇にからんではずれ、またからむ……。
女はそれに、手を出そうともしない。
これは絵になる。
五城は思った。
女もそのまま使いたい。できれば女は和服の方が、もっと似合うだろう。
問題は女にまつわる物語だが……。
そう思った瞬間、突然、破裂音が起こった。女の足元近くの土が、鋭く跳(は)ね返る音と同時に、黒い飛沫(ひまつ)となって飛び散った。
破裂音のこだまが、短く、小さく、山ひだの間に響い

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

て、すぐ消え……。
五城はその思いがけない光景と音の意味を、瞬時に理解した。
だが女の方は、まるでわかっていないようだ。当惑して、跳ね上がった土のあたりに目をやっている。
五城は女にむかって突進した。
女が顔をねじむける。
「あなたは……」
女は五城が誰かを、知っていたようだ。不意の出現に、当惑の言葉を小さく吐こうとした。だが、その時には、もう五城に左手首を、しっかりと握られていた。前のめりに転びそうになりながら、岩の蔭にひっぱりこまれる。
「いったい、どうしたのです!?」
「銃ですよ！　あなたは撃たれたんです!!」
「まさか……」女は、岩に軽く体を寄りかからせる姿勢になった。「……あなたは映画関係の人で……ですから、そういう恐ろしいことを考えつかれるのでしょうが……」
「いや、だから、知ってるんです！　撮影で、本物の銃を撃ったこともある！　アフレコしたこともある！」
とほうにくれた女の顔も、奇妙に美しい。
「なにかのまちがいでは……」
「まちがい？」
「猟師の人がまちがって撃った弾が、私の方に飛んで来たとか……」
「今でも、このへんにそんな猟師が、いるというのですか？　それも、夏の今どき？」
「そうでなかったら、なにか銃に似た、別の音では？」
そういわれると、五城も急に自信をなくした。
そういえば、あの破裂音は、馬鹿に開けっぴろげに大きいばかりで、銃の音にしては、シャープさがたりなかったように思えてきた。
彼はふと、なにか思いついたようだ。まわりを見まわした。岩の下からたくましくのび出ている灌木に目をとめる。
いそいでその小枝を折り取る。七、八十センチの長さの枝が手に持たれる。
「あなたのそのジャケットを、貸してください」
「でも、これは……」

「事実を確かめるために、ともかく試してみましょう。その結果で、どうしていいかも考えましょう」
五城はジャケットを受け取りながら説明した。
「この服を岩の端から、出してみましょう……」一方の先に、ジャケットをひっかけられて、細い小枝はひどくたわむ。「……もし狙撃者が、ほんとうにあなたを狙っているのなら、そして、まだあきらめていないなら、ひどく目につく色の服です。あるいはひっかかってくることも……」
五城は岩肌に体をすりつけるようにして、その端に行く。ゆっくりと、ジャケットを突き出す。
とたんに、銃声が爆発した。
普通の猟銃にくらべると、むやみに四方に拡がる馬鹿でかい音だ。だが、銃であることは、まちがいない。今度は、鼻先を空を切って飛び去る弾丸の、鋭い音を聞いたからだ。
同時に、ジャケットになにかが鋭くぶつかる音。服は空気をはたいて飛び上がると、地上に落下した。
さすがに、女の顔も美しくなくなっていた。青ざめ、こわばっている。胸の下に手をはんぱに組み合わせ、声もない。
「どうやら谷のむこうあたりで……しかし……狙いは確かのようで、むしろさっきはずれたのは、幸運だったかも……」
五城はいいながら、ほとんど地上に身をかがめるようにしてしゃがみ込んだ。小枝を持った腕を思い切り岩の蔭からのばす。何度か枝先から服をはずしながらも、とうとうそれを足元に引き寄せる。
「見てください」
拾いあげたジャケットを胸の前に拡げながら、彼は女の前に歩み寄る。
丸い穴が、胸のあたりにあいていた。
女の目が見張られる。
「でも……でも……どうして、私が……」
「それより、今はどうして、ここから逃げ出すかでしょう……」
五城は周囲を大きく見まわした。
女がさっき立っていた、ほぼ真後ろ、三十メートルばかり先に、石造りの鳥居があり、社殿に通じている。
下からあがって来た山道は、その鳥居の横手前に出

る。
そこまで突っ走って、木の繁りに覆われた山道に飛び込めば、谷からはまったく見えないから、安全だろう。
だが、そこに走る間は、完全に敵に身をさらすことになる。
しかし今、二人の立っている岩の後ろと左手は、わずかばかりの平地を置いて、谷の方に落ちこんでいる。
五城は谷のむこうからは、自分の姿が岩に隠れているのを確認しながら、その崖縁まで後すざりした。
「どうやら、おりられそうです。手を貸します。斜面を横断して、社殿の近くに一度あがり、また山道にむかっておりて行けばいいでしょう。さあ、早く！」
女には、いま一つ、事態の切迫性を認識していないようすがあった。だが、五城にきびしい声をかけられて、緊張をみなぎらせた。
五城に習って、崖縁まで後すざりする。すでに少し下におりて、腕を差しのばしている五城に手を出す。
土から突き出た岩角や木の根は、足がかり手がかりにもなったが、かえってそれが妨害ともなる。朽ち葉や落葉が靴裏を滑らせる。いばらの小枝が、顔や腕の肌につっかかってくる。
けっきょく五城は、先導して女にルートを教えるだけになったようなものだ。そして、女の方も、けっこう決まりの良さそうな気丈さと、軽い身のこなしで、五城の手も借りずについて来た。
時たま起こる強い風が、頭上の繁りを鳴らす。
しかし、そのほかには、物音らしいものはない。狙撃者の気配も……。
ひょっとしたら、無駄な、ばかばかしいことをやっているのではないか？
五城さえ、なにか、そう思えてくる感じだった。
やがて、五城は社殿横手のわずかの平地に這いあがった。
瞬間、彼は小さく、低い罵り声をあげた。
「どうなさったの？」
「いや、こんな所にスコップが転がっていて、つまずいて、危なく転びそうに……」
五城は靴先で、それを脇に押しやると、下にむかって手をのばし、女の最後のひとのぼりに手を貸した。
すぐさま、社殿の前の形ばかりの参道の踏み石を横切

って、向う崖の方に行く。
「だいじょうぶ。こっちの方が、楽そうな斜面です」
五城はふりかえって、女に教えた。
二人はまた、斜面の下降を始める。
すぐに杉木立の幹の間から、絶対安全圏の山道が見えて来た……。

2

「あなたは、確か江森さん……ですね？」
五城のいささか遠慮がちの問いに、女は慌てて答えた。
「そうですわ！　命の恩人に、自己紹介するのも忘れて！　江森道代です」
御岳神社から、小篠の耕地までは三十分強の道のりだった。そのくだりも勾配がゆるくなり、幅も拡がって、ぽつぽつと出現した民家の所で、二人の足取りもようやく、ゆっくりになった。
「もうしおくれたといっても……どうやら、さっきのようすでは、江森さんも僕のことをごぞんじのようですが、あらためて自己紹介させてもらいます。五城賀津雄です。しかし、恩人等という言葉は、僕むきじゃあなさそうで、閉口です。ましてや、それに『命の』なんてつけられると……」
「でも、私は誰かに銃で危なく殺されそうになったのでしょ？」
「しかし、あなたは信じられないようなようすでしたが……？」
「ええ」
答えたものの、彼女のようすには、どこか、なにか、ためらいがあることを、五城は鋭敏に感じ取っていた。
「僕はもちろん、江森さんのことは、詳しく知りませんから、さしでがましいことはいえません。しかし、村の中では、必ずしも……」
うっかり口をすべらせてしまったというように、五城はあわてて口を停めた。
だが江森道代は、爽やかなきまりよさで、その後を続ける。
「評判が良くないのでしょ。知っていますわ。東京から、好き勝手な時にやって来て、華美な服装で村の中を

歩きまわって……〝都会の狐〟だっていってるのでしょ？」
道代の五城にむけた顔には、屈託ない微笑が浮かんでいた。
「ええ、そういう渾名は聞きました。しかし、ちっとも狐に似ていませんが……。こういう田舎の人には、江森さんのような都会的な美人は、狐に見えるんでしょうか？」
「狐というのは、そういう意味ではないんです。江森の家は昔からの狐持ちなんだそうです」
「狐持ち？」
「つまり、狐が家にとり憑いているというんです」
「はあ……」
「先祖代々ですって。秩父事件の時にも……あなたはそれを調べに、ここにいらっしゃったんでしょ？」
「取材調査というほど、大げさなものじゃないんですが。二、三冊、本を読んで、映画になるいい材料はないかと思って来ただけです」
「その秩父事件の参加者は、金貸しの家や会社、大尽の家等を、ずいぶんたくさん襲ったのに、江森の家だけには、来ていないのです。きっとへたなことをして、狐にとり憑かれるのを恐れたんだろうという噂です」
「確かに江森家は、その頃から、ずいぶんの金持ちだったようですね」
「そういう家に、二十年以上もたって、突然、ここを出たはずの私が、東京から現われたので、都会の狐なんです」
「はあ……。天狗の伝説は、このへんには良くあるらしいことは、気がついていました。しかし、まだ、ここに来てから四日ですから、そういう狐の話を聞くのは、初めてです」
道代は変わらぬ、爽やかな歯切れ良さでいう。
「私がそうして現われたのは、江森の家や財産を乗っ取ろうとしているためだ。だから、良く蔵の中に入り込んで財産を調べたり、村の中を歩いて、土地を検分したりしているんだという噂があることも、承知していますわ。こういう狭い地域では、ほんとうのところ、噂というのは、当事者に聞こえよがしに囁いて、その人を傷つけるのが目的のようなところがあるんです」
「そうなんですか。江森さんの家の身寄りの方とは聞い

ていましたが……」
「私はあの江森の家の長男の、啓吉の一人娘なんです。でも、もう二十六年前もなんですが……母が死んで、その年に続けて父も死んで……私が四歳の時です。あら、私の歳はいくつですかという、算数の問題みたいになってしまって……」
道代は明るく微笑したが、五城は明るい声では答えられなかった。
「それはお気の毒……」
「以後、私は東京の母の実家にひきとられて育ちました。ですから、この小篠は私にとって、小学生や中学生の頃、夏休みに伯母といっしょに来て、少しの間、滞在したとか、秩父夜祭を見物に来て立ち寄ったとか、そんな思い出だけといっていいんです」
「それが、どうしてまた……？」
「叔父さんで、江森の家の三男の健造さんという人が、東京に住んでいて、ですから少しおつきあいがあったんです。その方が、ここの邸の部屋もずいぶんあいているから、別荘というと大げさだが、まあ保養所とでも考えて、週末を過ごしたらどうだという話があったので……。それで、私の専用の部屋なども作ってもらって、良く来るようになったのですけれど……」
「たとえ、それだけでも、やはりこの山の中の狭い耕地では、あなたはよそ者……しかも、都会の匂いをいっぱいにつけた、美しく、目立つよそ者ですからね」
「江森の財産なんて、考えたこともありませんでした。確かに昔は、江森家は秩父の在きっての大尽だったかも知れません。でも、今はそうではありません。いってはおかしいんですが、それなら私の方が、よほど東京で繁盛しているというか……」
「確か、バーかクラブを経営なさっているとか……そんなことくらいは、小耳に挟んでいるのですが……？」
五城はいささか遠慮がちに、たずねかえす。
「ええ、銀座で、ちょっとした店を。この頃は、経営もすっかり安定してきましたし、安心して店をまかせられるような女性もいますので、私はだいたい火曜日の夜から店に出て、土曜から火曜日の午前頃まではこちらで骨休めをしようと……ただそれだけで、滞在するようになったのです。それが命を狙われるなんて……」
そういわれれば、五城も返事に困る。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong